

## 世界のアーキビストがやってきた

### - ICA執行委員会東京会合報告 -

国立公文書館 小原 由美子

#### はじめに

2006年5月22日（月）から25日（木）まで、東京都港区の全日空ホテルにおいて国際公文書館会議（International Council on Archives、以下ICA）執行委員会（Executive Board Meeting）が開催された。菊池光興国立公文書館長が2005年4月にICA副会長に就任し、執行委員会の主要メンバーとなったことから、日本に会合を招致したものである。この会議のために17か国／地域から委員23名、同伴者2名、専門通訳者（英・仏）2名、合計27名が来日した。

執行委員会期間中、22日（月）にミコレツキー会長、グランジェ副会長、アルバダ事務総長と菊池館長が、内閣総理大臣官邸に安倍晋三内閣官房長官を表敬訪問した。また、議事の合間を縫って、23日（火）夕刻に当館の視察、24日（水）午後に江戸東京博物館の視察を行った。執行委員会終了後、25日（木）午後に記念講演会及びレセプションを開催、26日（金）には鎌倉・横浜視察を行い、横浜開港資料館を訪問した。

東京会合の開催については、昨年4月にワシントンDCで開催された執行委員会期間中にICA本部から開催を打診され、約1年かけて準備を進めた。執行委員会の議事内容の決定や資料作成はICA本部が行い、当館は全体的日程の設定や来日する委員の渡航・査証手続支援、宿泊、会場設営、視察、食事等のアレンジを担当した。総勢27名の来日メンバーを迎えるにあたり、東京全日空ホテル（会議会場及び参加者の宿泊、飲食）、トップツアー（株）（渡航手続や空港送迎、各種視察）、（株）エクシム・インターナショナル（通訳関係の調整や必要機材の設営）の3社にそれぞれ業務を委託し、当館職員と3社がタッグを組む形で準備を進めた。

#### 1. 執行委員会の役割

執行委員会は、ICAの運営に関し年次総会に次ぐ決定権を持つ機関で、年次総会で決定した政策やプログラムを実行に移す責務を負うとともに、事務総長、事務次長、プログラム委員会議長、選挙管理官等の任命を行う権限を持つ。構成メンバーは表1に示したとおりで、実際に参加したのはロレンツ・ミコレツキー会長以下表2の24名である。通常春と秋（円卓会議期間中）の年2回開催され、春季会合は委員選出国がホストを務めることが

慣例となっている。日本の国立公文書館長が執行委員となったのは、岩倉規夫初代国立公文書館長以来2回目だが、執行委員会を日本で開催したのは今回が初めてである。

**表1 執行委員会構成メンバー**

- |   |   |
|---|---|
| a | ICA 会長 1名   |
| b | 上席副会長 1名（次期総会開催国の国立公文書館長）、副会長 3名  |
| c | 会員による選挙で選出された、国立/連邦公文書館・中央公文書館機構の代表   |
| d | 地域支部議長  |
| e | プログラム委員会議長  |
| f | 記録管理及び公文書専門家協会部会議長  |
| g | アフリカ・アラブ諸国、アジア・オセアニア、ヨーロッパ・北アメリカ、ラテンアメリカ及びカリブの4地域のうち少なくとも3地域からの会員を持つ専門部会の議長 |
| h | 会計官   |
| i | 投票権のない事務総長  |
| j | 投票権のない事務次長（複数可）   |

## 2. 執行委員会の討議内容

会議は表3の議事次第に従って4日間6セッションにわたって行われた。会議の公用語は英語とフランス語で、長年ICAの会議通訳を担当している専門の同時通訳者2名がオーストラリア及びスペインから来日して英 - 仏の通訳を務めた。主な討議概要は以下の通り。

### 2.1 開会

- (1) 来日の遅れたミコレツキー会長に代わって菊池館長が開会の挨拶を述べ、日本が初めて執行委員会の開催受入国となれて光栄である、実りある会議を願うとともに、各委員に日本滞在を楽しんでほしい、と歓迎の意を表した。
- (2) 昨年3月の選挙において立候補者がなく、懸案となっていた会計官と監査委員長の人選について、執行委員会としての指名により新会計官にスウェーデン国立公文書館長のトマス・リッドマン氏を、新監査委員長にベルギー国立公文書館長のカレル・ヴェル氏を任命した。

### 2.2 クイック・スキャン ICA

- (1) この議題は昨年春ワシントンDCで開かれた執行委員会でも取り上げられたもので、前回は、2004年に大幅改正された憲章に基づいてICAの新時代を築くにあたり、ICAの長所と短所について、委員の率直な意見交換を行った。今回は、特にアーカイブズ及びアーキビストを脅かしている問題、積極的に取り組んでいくべき好機等について、各委員が発言した。社会におけるアーカイブズの認知度は低く、ICAの存在もなかなか

表2 ICA執行委員会2006東京会合出席者

氏名	国名	肩書 / 所属	ICA肩書
Mr. Lorenz MIKOLETZKY	オーストリア	国立公文書館長	会長
Mr. Mitsuoki KIKUCHI	日本	国立公文書館長	第一副会長、A会員代表
Mr. Didier GRANGE	スイス	ジュネーブ市立公文書館長	第二副会長、専門部会代表
Mr. Olafur ASGEIRSSON	アイスランド	国立公文書館長	プログラム委員会議長
Ms. Nolda C RÖMER-KENEPA	オランダ領アンティル	国立公文書館長	CARBICA カリブ地域支部議長
Mr. Antoine LUMENGANESO Kiobe	コンゴ民主共和国	国立公文書館長	CENARBICA 中央アフリカ地域支部議長
Mr. MAO Fumin	中国	国家档案局長	EASTICA 東アジア地域支部議長
Ms. DU Mei	中国	国家档案局国際部次長	オブザーバ
Ms. Kelebogile KGABI	ボツワナ	国立公文書記録局長	ESARBICA 東及び南 アフリカ地域支部議長
Mr. Vladimir KOZLOV	ロシア	連邦公文書館長	EURASICA ユーラシ ア地域支部議長
Mr. Kirill CHERNENKOV	ロシア	連邦公文書館国際部長	オブザーバ
Mr. Thomas CONNORS	アメリカ	メリーランド大学文書館	NAANICA 北米地域支部議長
Mr. Setareki TALE	フィジー	国立公文書館長	PARBICA 太平洋地域支部議長
Mr. Assane SAWADOGO	ブルキナ・ファソ	国立公文書館長	WARBICA 西アフリ カ地域支部議長
Mr. Hans Eyvind NAESS	ノルウェー	国立公文書館	SBL (ビジネス・労働) 部会議長
Mr. Jan E.A. BOOMGAARD	オランダ	アムステルダム市立 公文書館長	SMA (市立公文書館) 部会議長
Mr. Frederick L. HONHART	アメリカ	ミシガン州立大学 アーカイブ	SUV (大学・研究機関) 部会議長
Mr. Günther SCHEFBECK	オーストリア	オーストリア議会 アーカイブ	SPP (議会・政党) 部会議長
Mr. Karel VELLE	ベルギー	国立公文書館長	監査委員長
Mr. Joan VAN ALBADA	オランダ	ICA本部	ICA事務総長
Ms. Perrine CANAVAGGIO	フランス	ICA本部	ICA事務次長
Mr. Marcel CAYA	カナダ	ケベック大学 モンリオール校	ICA事務次長
Ms. Mahfuzah YUSUF	マレーシア	国立公文書館	ICA事務次長
Ms. Annick CARTERET	フランス	ICA本部	ICA事務局員

表3 ICA執行委員会2006 東京会合 議事次第

- 1. 開会**
  - 1.1 定足数の確認
  - 1.2 開会の辞 - ICA会長及び開催国ホスト
  - 1.3 新規委員の選出
  - 1.4 退任委員と新任（補充）委員
  - 1.5 議事の承認と追加
- 2. クイック・スキャン ICA**
  - 2.1 ICAの長所短所再考
  - 2.2 好機と脅威
  - 2.3 地域支部と使用言語 - ガバナンスと専門的内容へのアクセス
- 3. ガバナンスと管理運営**
  - 3.1 会議録及びアクション・リスト
  - 3.2 カテゴリーA及びB会員
  - 3.3 カテゴリーC及びD会員
  - 3.4 運営組織の空席
  - 3.5 ICA憲章について
  - 3.6 年次総会及び円卓会議開催地候補
  - 3.7 ICA本部関係
- 4. プログラム**
  - 4.1 戦略プランとビジネスプラン（1）
  - 4.2 専門プログラム
  - 4.3 CITRAとICA大会
  - 4.4 地域支部及び専門部会からの支援要請
  - 4.5 通信
  - 4.6 マーケティング&プロモーション
  - 4.7 刊行物
- 5. プレゼンテーション**
  - 5.1 日本国立公文書館による発表
  - 5.2 ICAとマーケティング&プロモーション（キャンセル）
  - 5.3 国際協力
- 6. 財政問題**
  - 6.1 財務報告
  - 6.2 予算状況予測
  - 6.3 新たな国際アーカイブズ開発基金（Fund for International Archival Development, FIDA）
  - 6.4 戦略プランとビジネスプラン（2）
- 7. 今後の討議事項**
  - 7.1 執行委員会
  - 7.2 年次総会
  - 7.3 管理運営委員会
  - 7.4 プログラム委員会
  - 7.5 CITRA事務局
- 8. 褒賞**
- 9. その他の事項**
- 10. 今後の会議開催予定**
- 11. 閉会**

か国の政府を動かすには至らないという意見や、情報通信技術の発展がアーキビストの存在意義を脅かしつつあるという意見、ICAは会員の信頼を得るに足る活動を行っているだろうか、という厳しい意見等が出た。最後に、グランジェ副会長からICAの歴史を記録するプロジェクトが提案され、2008年のICA設立60周年に向けて取り組みを検討することになった。

- (2) ラテンアメリカ地域支部からICAの通常用語として英語、フランス語と並び、スペイン語を使用するよう要望が出ていることを受けて、ICAの使用言語に関してアルバダ事務総長がまとめた文書を検討、次回キュラソーの執行委員会でも引き続き討議することになった。

### 2.3 ガバナンスと管理運営

- (1) 前回のアブダビの円卓会議以降に開かれた執行委員会、年次総会、CITRA事務局会合、管理運営委員会等の運営会合の議事録の承認、新入会員の承認等を行った。提出された資料によると、2006年現在で、ICAの会員数は192国 / 地域1,470会員とのことである。(表4参照) 空席となっていたCITRA事務局のアフリカ・アラブ地域代表には、エチオピア国立公文書館図書館長が推薦され、承認された。
- (2) 2004年の憲章改正を受けて、各地域支部憲章及び専門部会規則を、ICA憲章の内容に沿ったものにするための地域支部憲章ガイドライン案及び専門部会規則ガイドライン案が提出され、それぞれ地域支部代表、専門部会代表が内容を精査することになった。
- (3) B会員（アーカイブズ専門団体会員）、D会員（個人会員）にそれぞれB-2会員（国際機関）、D-2会員（学生などの低会費会員）を設けること、また刊行物のみの購読会員を創設する案が出され、今年の年次総会に提案し、また必要な憲章改正を2007年の年次総会にかけることが了承された。これは昨年の年次総会に提出された財政再建タスクフォースの提案に基づくものである。



執行委員会開催の様子

表4 ICA会員数一覧

	Cat.A	Cat.B	Cat.C	Cat.D	Cat.E	合計
ヨーロッパ	82	42	733	119	27	1003
アフリカ	47	3	21	4	5	80
アジア	42	6	40	18	8	114
オセアニア	16	2	18	9	0	45
アメリカ	37	16	90	76	9	228
合計	224	69	902	226	49	1470

(執行委員会配布資料より)

- (4) 憲章53条bが各地域支部のA及びB会員になるためには、まずICA会員にならないといけない、と定めていることについて、ラテンアメリカ地域支部が修正を求めている件についても検討され、同支部代表が今回欠席であることから、次回の秋の執行委員会で再び検討した上で、年次総会で討議するかどうか決定することになった。
- (5) 今後の会合の開催地については、2009年の円卓会議をマルタで開催することが拍手とともに承認された。
- (6) イギリス国立公文書館の支援により、同公文書館のデビッド・ライチ氏が、本年7月から上級プログラム担当官としてパリのICA本部に派遣されるとの報告があり、会員から英国への感謝が表明された。
- (7) 続いて、アルバダ事務総長の後任問題が大きく取り上げられた。アルバダ事務総長は2008年12月に退任する予定となっているが、引継ぎを十分に行なうため、後任者と半年から1年の間一緒に働くことを希望しており、後任人事を2007年中に行いたい意向である。事務総長として具備すべき要件について討議した際には、アルバダ事務総長は自ら席をはずし、カヤ事務次長が議事を進めた。事務総長は世界のアーカイブズ界を代表するICAの外務大臣であり、会長を表に立てながら、各国政府などと交渉を行ったり、また、時には水面下で会員の意見をよく聞くことも必要である、そのためにも数ヶ国語に堪能であるべきである、交渉等の外交手腕や経営感覚、本部職員を統率するリーダーシップ、アーカイブズの長としての豊かな経験が必要である、といった意見が出された。今後、管理運営委員会(MCOM)メンバーを中心に選考委員会を組織し、募集要項を定めて公募し、2007年中には面接を行って後任を決定する方向で進めていくことになった。

## 2.4 プログラム

- (1) 昨年からICA財政再建問題を検討してきた過程で、まずICA戦略プラン及びビジネスプランを策定し、それらにのっとった予算案を作成するべきである、という米国国立公文書記録管理局からの強い要請があった。このたび初めて両プランの案が示され

たが、詳細な検討は先送りされ、今後、実際に戦略プランの策定に携わった経験を持つカナダ国立図書館公文書館のアンドレア・デラグレーブ氏の助力を得ながら改訂を進め、今年の年次総会提出をめざすことになった。

- (2) 2004年ウィーン大会において、4つの優先領域に関するプロジェクトを中心とした活動を活発化していく方針が了承されたが、教育研修部会議長による意見書をもとに、改めてICAが進めるプロジェクトと専門部会（section）のあり方について検討した。今後、各専門部会委員長による討論を行った上で意見書に修正を加え、秋の執行委員会で再度検討することになった。
- (3) UNESCOで検討されている10月27日を世界オーディオビジュアル遺産の日とする動きについて、オーディオビジュアルに限定しない、国際アーカイブズの日を設けるようICAとして働きかけているところであるが、特段の進展をみていないことが報告された。
- (4) このほか、今後の円卓会議及び国際公文書館大会の準備状況の報告、HPやメーリングリストの構築状況、今後のICA刊行物のあり方等が討議された。

## 2.5 プレゼンテーション

- (1) 23日の午後、場所を国立公文書館に移し、当館においてデジタルアーカイブのプレゼンテーション、及び館内施設・展示の案内を行った。
- (2) 国際協力については、世界情報社会サミット、UNESCO、みんなのための情報（IFAP）プログラム、メモリーオブザワールド、国際ブルーシールド委員会等における、ICAに関連する活動が報告された。

## 2.6 財政問題

- (1) ICAの財政再建問題については、昨年からタスクフォースを組織して検討を行ってきた。アブダビの年次総会で全ての分担金をユーロ払いとすることに決め、各国に会長から財政再建への協力を訴えた結果、収入については若干明るい要素も見られる一方、外部監査や財政支出報告のあり方については様々な問題点が指摘された。
- (2) 財政再建タスクフォースは、2005年の正確な決算報告を求め、これに基づき再建案を引き続き検討し、修正案を年次総会に示すべく作業を進めることになった。

## 2.7 その他

- (1) 功労者への褒賞については、アメリカ・アーキビスト協会の例を参考に、授賞の基準等を定める委員会を組織することになり、トム・コナーズ、ディディエ・グランジェ、フレデリック・ホンハルト、ヘレボギル・ハビの各委員が委員会メンバーとなった。
- (2) 今後の運営会合の日程案が示され、来年春の執行委員会はアイルランドのレイキアビークで開催されること等が決まった。

### 3．記念講演会の開催

執行委員会はICAの運営会合のため非公開だが、一般の方々も参加できるプログラムとして、執行委員を講師とする記念講演会「世界の公文書館は今 - ICA執行委員会開催記念講演会」を企画した。5月25日（木）午後1時30分から4時45分まで、港区赤坂の国際交流基金国際会議場において、当館主催、国際交流基金後援により開催した。当日は翌5月26日（金）に開く毎年恒例の全国公文書館長会議に参加する地方公共団体の公文書館長や大学・関係団体の代表者など、各方面から幅広く、121名の参加者を得た。

まず、菊池館長から、この記念講演会の開催趣旨の説明と各講演者に対する謝辞の表明があった。次に、ロレンツ・ミコレツキー会長からICAの沿革と活動内容についての紹介があり、続いてディディエ・グランジェ副会長（ジュネーブ市立公文書館長）、ヘレボギル・ハビ東及び南アフリカ地域支部議長（ボツワナ国立公文書記録局長）、セタレキ・タレ太平洋地域支部議長（フィジー国立公文書館長）、ジョアン・ヴァン・アルバダ事務総長の各氏が、それぞれ30分ずつの講演を行った。最後に登場したアルバダ事務総長は、「アーカイブズ」という言葉を改めて考察し、電子情報社会においてアーキビストが果たすべき役割について、アーキビスト自身の意識変革を促した（講演会内容の詳細は10ページ以下を参照）。

会議の準備段階で、アルバダ事務総長から日本のアーカイブズ関係者と交流したい、という要望が寄せられていたこともあり、当館では、例年6月に開いている全国公文書館長会議の時期を繰り上げて開催し、地方公文書館の皆さんに、講演会及び終了後開催されたレセプションにご参加いただいた。日本と世界各地の公文書館長が意見交換を行う貴重な場となったと思う。

### 4．世界のアーキビストとの交流

会議開催を通じて、筆者を含む当館役職員は、世界各国のアーカイブズ界のリーダーたちと直接交流する稀有な機会を得た。会議中は時には厳しい応酬を展開した論客たちも、自由時間や視察においては和やかに談笑し、旺盛な知的好奇心をもって日本滞在を楽しんでいた。会期中の思い出は尽きないが、忘れがたいエピソードを1つ紹介したい。

国立公文書館主催で東京湾の屋形船クルーズに出かけた夜のことである。夕方から雨が降り出し、品川の乗船場に着くころには土砂降りとなり、稲光が閃き雷鳴が轟く中、屋形船に乗り込むことになった。我々主催者は、夜景は諦め、食べて呑むしかない、と意気消沈。料理が運ばれ、宴たけなわとなった頃、中国の毛福民国家档案局長が、菊池館長に自作の詩を送りたい、と立ち上がった。張りのある声で朗々と詠じられた七言律詩にはこうあった。「夜の雨が東京湾をぬらし、礼砲に迎えられて賓客が船に乗る、波は銀鎖のように輝き空に繋がり、真珠のような稲光が岸壁をめぐる…」毛局長は、雷鳴を礼砲にたとえ、土砂降りの東京湾の宴を美しい一幅の水墨画のように生き生きと描き出してくださっ



たのである。続いて、当館随一の名テナー、中島係長が立ち上がり、「からたちの花」を熱唱。すると今度はボツワナのハビ局長が手を挙げ、母国の楽しい歌を披露。それからは次々とマイクがわたって、いったい何人のアーキビストが美声を聞かせて下さったであろうか。ときには全員が唱和し、歌声と笑いと拍手が続いた。こうして、悲惨に終わるかと思われた屋形船クルーズは、世界中のアーキビストの温かさや親しみに包まれた、最高に楽しい夜となったのである。

アーカイブズとは直接関係のないエピソードかもしれないが、このような楽しい思い出、顔の見える交流の積み重ねが、世界と日本のアーカイブズの距離を縮め、国際的



自作の詩を朗読する毛中国国家档案局長（左）と菊池館長

な公文書館活動における日本の存在感を高めることにつながれば、と願う。来年は10月にICA東アジア地域支部（EASTICA）の総会及びセミナーを東京で開催する予定で、準備に入っている。今回の会議開催の成果と反省を踏まえ、国内の関係者・関係機関各位のご協力を仰ぎながら、内容のある充実した会議の開催に向けて努力していきたい。